

## 横井小楠の伊勢参宮

著者	山口 宗之
雑誌名	久留米工業大学研究報告
号	17
ページ	91-95
発行年	1993-12-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1503/00000242/">http://id.nii.ac.jp/1503/00000242/</a>



# 横井小楠の伊勢参宮

山口 宗之\*

Visits to the Ise Jinguh (伊勢神宮) by Shohnan Yokoi

Muneyuki YAMAGUCHI

## Synopsis

Shohnan Yokoi has been considered to lack his enthusiasm for the Emperor worship. However, he often visited the Ise-Jinguh, and studied with zeal the Nanchoh-shi (南朝史). It is necessary to re-evaluate him in these respects.

### 1. はしがき

江戸時代盛況をきわめた民衆の伊勢参宮とはうらはらに武士のそれはきわめて低調であり、20対1もしくは30対1の対比となっていた。封建領主の統制強化により藩士の行動の自由がきびしく制限されたためといわれる<sup>1)</sup>。

幕末期になってもこの傾向は変ることなく、橋本左内・有馬新七・平野国臣にあっては一度ならぬ東海道往復の機会あり、左内のごとき奈良・大和地方遊歴の旅をもちながら伊勢路を志すことなくして終った。これに反し真木保臣は前後2回私用上京を経験し、いずれも1か月乃至3か月の間京都に滞留の時期をもったが、いちどの代参を依託したままで終っている。いっぽう吉田松陰は私費による京都・大阪・奈良方面遊歴中宇治山田を訪れ外宮参拝の足跡を残した。しかし内宮参拝の確認がないまま滞在20時間にして匆忙帰路についている。かくのごとくいわゆる幕末尊王の志士にとって伊勢参宮はその志を育てるための必須の行となっておらず、現実に伊勢皇大神宮にぬかずいたものむしろめずらしいという状況が一般的であった<sup>2)</sup>。

しかるに横井小楠が上国遊歴の途中嘉永4(1851)年5月15・16日神宮参拝を果している事実が注目される。周知のごとく小楠は幕末維新期を代表する人物のひとりであるが、志士というより朱子学の純粋な学者であり、政治家と呼ぶより要路者の帷幄にあって補佐するプレー

ンともみなされる存在であった。その思想は賢愚にかかわらず血統により皇位をつぐ日本の国風は非、これに反し英明の人物を選んで統領におす西洋の風こそ先王の道に叶うとした偽書が誤伝され、またキリスト教の奨励をもくろむ者とみなされて暗殺の禍に遭ったごとく、むしろ幕末尊王思想の系譜から逸脱した人物であるかのごとく把握されているのが一般的傾向であろう<sup>3)</sup>。そこでその小楠が数多い幕末尊王派志士のなかにあってもみずから伊勢路を訪い、神宮参拝を確実に果している珍しい存在であることを改めて紹介するとともに、小楠における尊王思想の意味を再考してみたいと思う。

### 2. 神宮参拝

小楠は嘉永4年43歳のとき諸国遊歴を企て2月18日熊本出発、北九州・山陽道・南海道(紀州のみ)・畿内・東海道(名古屋まで)・北陸道(金沢まで)のおよそ21藩を歴訪し、8月21日帰国した。その道筋は柳川・久留米・秋月・下関・長府・徳山・岩国・広島・福山・岡山・姫路・兵庫・大阪・岸和田・和歌山・大和・河内・奈良・宇治・大阪・大津・津・山田・桑名・神戸・名古屋・大垣・彦根・府中(武生)・鯖江・福井・大聖寺・金沢(これより帰路)・福井・敦賀・大阪・中の関・三田尻・山口・萩・赤間関・大里・赤間・小倉・福岡・博多・太宰府・久留米・柳川という順序であった。

この旅程のうち柳川から紀州までの見聞については随

\*教養部

平成5年9月22日受理

行した門人徳富一義（蘇峰の叔父）に口述筆記せしめた『遊歴聞見録』があり、旅中の京都から熊本の友人米田是容に贈ったものが『横井小楠（遺稿篇）』に収められている（823～846頁）。すなわち柳川・久留米・秋月・下関（長州）・長府・徳山・岩国・広島・福山・松山（備中）・岡山・姫路・紀州各藩について土風・風俗・制度・財政状態・藩校ないし学派学統の様子また地勢・河川およびその防備状態等につき詳細にしるされているが、いかなる道をどう歩きどこに泊ったかについては触れていない。これに対し旅中4月朔日岡山を出発して以後旅費を重ね熊本に帰着するまで4か月を越える期間の旅費および小楠一行の日々の行動については徳富自身が丹念にしたためた『東遊日録』によって知ることができる（『横井小楠（伝記篇）』169～247頁採録）。以下これにより小楠の足跡を追ってゆくこととする。

4月朔日岡山藩閑谷学校出発、4月2・3・4日姫路、4月5日大久保（明石領）、4月6日兵庫、4月7・8・9日大阪（中ノ島）、4月10日貝塚、4月11・12・13・14日和歌山、4月15日粉川・名手を過ぎた峠、4月16日吉野、4月17日千早、4月18日竹ノ内町、4月19日神武天皇御陵を経て奈良、20日木津、4月21日より5月朔日まで京都、5月2日より5日まで大阪、5月6日より9日まで再び京都、この間梅田雲浜・春日潜庵・梁川星巖らとしばしば会い問答を交わすことがあった。5月10・11日大津、5月12日石部、5月13日鈴鹿峠より伊勢路へ折れ楠原に泊る。いよいよ神宮参拝の路につくのである。

5月14日早朝楠原立出、椋本、窩田（窪田）を経て午前10時前、津の北町につき大和屋喜三郎に投宿。夕方郡奉行として治績をあげた津藩有道館督学参謀として武技振興に力を尽した平松楽斎宅をたづね談話。5月15日津を出発、雲出・六軒・松阪・櫛田・稲木・小俣・宮川を経て宇治山田外宮前の町田屋某に投宿。夕方外宮神宮で国学者足代弘訓を訪ね、紀州藩松阪住人世古喜平ら数人同席で写本交易のことについて相談した。

5月16日風雨つよいなか内宮参拝、ついで10キロほどはなれた天岩戸社まで参拝して昼ごろ帰宿、しばらく休息してのち宇治山田外宮櫛田に向かい米屋太郎兵衛に泊り、5月17日昼津の大和屋に戻った。この日夕方ふたたび平松楽斎宅を訪問、斎藤拙堂を交えて酒を飲み談話、午前2時に至った。徳富は斎藤について朱子学者ながら功利におちいり「吏才」ある人物との評を下している。5月18日津を出発、上野・神戸・追分・四日市を経て桑名乗船場の大坂屋弥次左衛門に投宿。5月19日午前9時桑名

出帆、宮で船を降り熱田宮に参拝し午後4時名古屋本町6丁目銭屋所次左衛門に投宿、以後6月5日まで半月間ほど滞在した。

以上によって考えるに小楠の神宮参拝の経過は次のごとくである。5月15日おそらく昼過ぎ宇治山田着、16日午後櫛田に向かうまで足かけ2日、およそ24時間伊勢に滞留したことになる。16日の内宮参拝は明白であるが、15日外宮参拝をなしたか否か、判然としない。しかし昼すぎ外宮前に到着していること、同じく足代弘訓をたよって宇治山田を訪れた吉田松陰がまず外宮参拝を果していること<sup>4)</sup>、足代が外宮神宮であり宿が外宮門前であったこと、等を并考するにこの日小楠が外宮に参拝したことはほとんど疑うところなしと考えるところである。

諸国遊歴の途次神宮参拝を志した小楠自身の積極的関心は奈辺にあったのか、史料的には不明であり、かつ参拝にあたっての感慨など窺うによしない。しかし風雨ともにはげしいなか、内宮より2里以上はなれた天岩戸社まで足をのばした熱心さを思えば、小楠の神宮参拝がたんなる史癖ないし好事家の趣味を越える何物かがあったためと推考せざるを得ないのである。これを小楠と同じ学識の持主であり天皇敬慕の志篤い松陰・保臣にあって前者は外宮参拝にとどまり後者は代参を依託するに終ったこと、参宮への志向の事実を全く残していない左内・新七・国臣らの場合と比較するとき、たとえ自由かつ拘束なき遊歴の途中といえ、おそらく両宮参拝を十分に果し終えた小楠は幕末人士中のめずらしい例として注目すべきであると考えらる。

### 3. 南朝関係史蹟巡歴

いうまでもなく小楠は堯舜先王の道を厳肅に体现せんと志すもっとも純粋な朱子学者であった。小楠は学問の要とするところ心を磨くにあり必ずしも書を読む必要なしと唱えた時期があるものの、みづからは千巻の書を読破した。また洋書を読みぬため、手づるを辿って漢訳本を取り寄せ海外知識の吸収につとめたといわれる。このうち和書・国史関係書では山崎正董博士によると「神皇正統記」「太平記」「難太平記」「参考太平記」「増鏡」「大鏡」「大日本史」「説史余論」「新論」などがあげられ、大鏡・増鏡・神皇正統記・太平記はとくに熟読した書物といわれている（『横井小楠（伝記篇）』1069～1070頁）。これに対し筆者はかつて小楠の読書関係書目を検出し分析を加えたことがあった。すなわち伝記および関係史料より書籍に関する記事——閲覧・購入・借用・伝聞等——を

細大もらず拾いあげて和・漢・洋・部門別不明の4部分に分け、かつ通読確実・抄読程度・取扱い程度に整理した結果、総計136種(部)の書籍名があきらかとなった。その内訳は和36, 漢86, 洋5, 部門別不明9である。しかしこれは61歳の生涯を学者として生きた小楠であるのに対しいかにも少なすぎる。したがってその読書生活の全容を伝えるものでは決してないこと、あきらかである。しかしながら史料にあらわれた事実はたとえ微細であり、かつ大幅な限定つきのものであるにせよこれを積極的に活用してゆくのが史学研究の常道である以上、136部の内容によりつつ考察をすすめてゆきたい。

さて参宮にかかわる書物といえば当然和書関係36部であろう。まず通読したこと確実と思われるもの

大日本史 見聞私記 島原志 藤崎八幡宮社経堂記

以上、4部。

つぎに史料的には抄読程度と思われるもの

大鏡 新論 神皇正統記 太平記 参考太平記 難太平記 増鏡 読史余論 皇朝史略 仰景録 慕景集 江戸名所図会 南亭余韻 水府史 (諸州) 風土記 鎌倉大草紙 龍宮夢物語 道灌一代記 甲斐宗運記 五楽園詩鈔 日本史(カ) 史(カ)

以上、22部。

同じく史料的には取扱い程度と推察されるもの

国史纂論 常陸帯 政語 農家立教 小牧御陣覚書 横井一統系図 次郎吉家系 太政官日誌 鎮城府日誌 京都府日誌

以上、10部。これらは必ずしも書肆から公刊されたものばかりでなく、写本・覚書の類を含んでいると思われる。また書名の表記が不十分であるのも見うけられるが、ともあれ小楠の和本関係書目は以上の36部が史料的に検出したすべてである<sup>5)</sup>。

これらの和書関係書目をみて連想するのはとくに神宮史に対する積極的関心が窺えぬうらはらに、南北朝史に対する小楠の関心の深さであろう。周知のごとく天保12(1841)年33歳のころ起稿した「南北朝史稿」があり、承久の変からはじめ新田義貞の戦死に至り中絶している。このなかで小楠は南朝正統を唱え、正成・義貞・北畠親房・菊池氏ら南朝側の武将を推称すること切なるものがあつたが、とりわけ楠木正行に対する敬慕の思い深く「正行の精神を嘆美し其の心懸を模範とすべく逸早く小楠と号した」(山崎正董『横井小楠(伝記篇)』17頁)

とされるところである。したがって参宮に先立つ4月16日雨のなか峠の宿を出発し橋本・五条を経て吉野に到り村上義光墓・如意輪寺・後醍醐天皇御陵を拝して一杯の酒をそそぎみずからも一杯呑んで奉弔、記念の石を拾って引返した。のち再び如意輪寺に戻って正行の「勅作の御像」を拝し、かの鑑の和歌の拓本を貰い菊池武光画像の奉納を約している(同173~174頁)。4月17日快晴、奥院から金剛山をきわめてのち千早城跡に至り千早村樽木屋平四郎に投宿。4月18日晴、案内人を雇って再び千早城跡に登り図面を造って往時を偲んでのち山越えして観心寺を訪れ、正成の首塚ついで後村上天皇御陵に参拝。しかるのちまた山を越え上赤坂の赤坂城跡をのぞんで竹内町白屋源四郎に投宿。この間千早城跡から石・竹を携え帰り熊本に戻ってのちの12月5日柳川藩立花菰岐にこの竹を軸とした筆と石とを贈り、精神修養のよすがとなるべきをつたえたのである(同書179~180頁)。いわく「一小石一筆管以テ楠公ノ忠誠神武ヲ想ヒ見ルベシ。孤城ニ櫻ル百万之賊鋒ヲ挫キ天下義士之氣ヲ振起ス。則チ是又靈池ヲ修養セントスルニ非ズヤ、如何々々(原漢文、『横井小楠(遺稿篇)』161頁)

かくのごとく小楠が南北朝の史実に通じ関係史跡に深い関心をもったことは4月19日懿徳天皇・神武天皇御陵に参拝したこととともに、その日本歴史への造詣の深さを示すものであろう。しかもそれが単なる好事家的性癖にとどまるものでなく、心情的敬慕・共感の思いに支えられていたことに注意しなければならない。関係史跡より記念の木石を携え帰るのは今日も多く見られるところであるが、小楠の場合はかりそめのものでなかった。諸国遊歴の旅に先んずる嘉永2年、かつて小楠塾に遊学していた旧知の福井藩士三寺三作に越前藤島海岸なる新田義貞戦死の地の石の採取、送付を依頼、

玩好奇癖おかしく御座候得共勤王諸公忠死のいさましき処平生感慕仕候間、此一玩石も又実に忘れがたみにして、朝夕もてあそば自然に卑劣の心さりて義理之満心新なるべし。呉々御配意奉頼候(同書137頁)

としるしているところによれば志士ならざる学究の徒、冷静な知識人思想家と目される小楠のなかに、意外につよい「勤王」の心情がひそんでいることに驚かされる。

「大日本史」「日本外史」が流布していた幕末期、南北朝史に関心ありなかならず吉野の悲史を慷慨した人士少くないが、つぶさにその史跡をたづねたはもちろん、両宮参拝をも十分に果たしたと思われる小楠の意義は決して忘失されてならない。

#### 4. その尊王的心情

しかし小楠は従来「尊王心に缺けてゐる」(山崎正董『横井小楠(伝記篇)』1124頁)人物とみなされ、「共和政治の価値を認めると同時に米国の国情を歎美し、華盛頓に私淑傾倒すること堯舜の如くであったこと」(同)が誤解を招き、かつ「夷賊に同心し天主教を海内に蔓延せしめんとす(中略)売国之姦」(『斬奸状』同988頁)として刺客の兇刃に倒れたことはよく知られている。

また慶応3(1867)年3月の日付でつくられた「天道覚明論」は小楠の反尊王・反日本の思考をことさらあげつろう目的のもとに小楠暗殺後それを正当づける材料として偽作された約650字の小論であるが、熊本敬神党・尊攘党によりいかにも小楠の真筆であるかのように喧伝せられた。ために犯人の処刑が1年10か月も遅れる因をなしたといわれる(圭室諦成『横井小楠』昭和42年吉川弘文館、325～331頁)。

しかしながら山崎正董博士はその思考型式を著作・書状・詩文に至るまで渉猟・分析かつ総合して小楠における尊王心の所在を明弁するとともに、「小楠の尊王心の片鱗を窺ふべき一二の事実」としてつぎの条々をあげている。明治元年京都紫宸殿の付近を通行中その瓦が落ち土にまみれているのを見て拾い帰り、桐箱に収め大切に保存していたこと、新田義貞戦死の地の石を取り寄せんとしたこと、吉野の山奥に分け入って後醍醐天皇御陵を拝したこと、楠木正成ゆかりの千早城を訪ね石と竹とを携え帰り筆を作ってその志をしのんだこと、楠木正行を敬愛すること厚く菊池武光の肖像を如意輪寺に寄進し忠臣を仰慕顕彰する至情をみせていること、等をあげこれを確認する(以上、『横井小楠伝(伝記篇)』1123～1134頁)。

しかし筆者は山崎博士がそのことを十分叙述しつつとくにことあげすることを逸せられた小楠の伊勢参宮、とりわけ両宮はもちろん、天岩戸社まで風雨をいとわず参拝した事実の重みを、小楠の明治維新史上における歴史的位置づけ再考の上で改めて痛感するのである。

#### 5. むすびにかえて

幕末志士中において尊王攘夷派の典型といわれる吉田松陰、倒幕・王政復古をいち早く唱え徳川討滅の直接行動の先頭に立った真木保臣、ともに藩の拘束を受けぬ自由かつ長期の近畿方面遊歴の機会をもち、のぞむべくんば両宮参拝を果すべき十分のときがあった。しかし松

陰は宇治山田滞留1日足らず匆々の外宮参拝にとどまり、保臣は2度にわたる京都滞留中いちど代参を依託するに終ったのである。また橋本左内は上京・朝廷入説の運動のなか閑暇を得て宇治・奈良・大和地方巡歴の旅をもったが、伊勢路に足を伸ばし神宮参拝を志す気配は全く示すことなかった。さらに有馬新七・平野国臣のごとく幕藩体制の桎梏からはなれ倒幕・王政復古を志向したと考えられる志士にあっても伊勢参宮を果すに至らなかったのはもちろん、その遺文中にもこれを志していたという事実さえ発見できなかった。さらに高杉晋作・久坂玄瑞・坂本龍馬らも同様であり、明治維新後なお10年を生きた西郷隆盛もまた管見の限り参宮を行った事実はないのである。

このことは国民の総氏神観にもとづいて国民的義務とされ一生一度の参宮が全国的普遍性をもつに至った江戸時代末期、明治維新運動のイデオログともいべき志士グループにとって参宮は必須のものとなっていなかったのを意味する。

このなかにあつて従来ともすれば反尊王・反日本の思想家とみなされ、そのために暗殺されたともいべき小楠が南朝史に興味をもち追慕景仰した事実もさることながら、伊勢参宮を確実に果した幕末期めづらしい例であったという事実を忘却してはならない。

けだし人物の思想を論ずるにあたって著作にしろされた論理を辿ることのみでよとせず、行動を含めた全存在を視座に入れ総合的考察を必要とする所以は、小楠においてもっとも適切であると思われるところである。

#### 注

- 1) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(昭和57年塙書房)第9章第1節、第10章第1節。
- 2) 小論「幕末人士の伊勢参宮」(『鶴久教授退官記念国語学論集』平成5年桜楓社)。
- 3) 小楠研究には明治以後多くの文献があるが、決定的なものは山崎正董『横井小楠』(全2冊、昭和13年明治書院)であり、筆者は多くこれによった。なお筆者にも小論「橋本左内・横井小楠——反尊攘・倒幕思想の意義と限界——」(『日本思想大系』55、昭和46年岩波書店)があり、小楠の意義と限界についてのべるところがあった。
- 4) 小論「幕末人士の伊勢参宮」
- 5) 以上、小論「幕末志士関係書目の研究——横井小楠の場合——」(『久留米工業短期大学研究報告』5、昭

和41年)を参照せられたい。

(平成5・9・4)